様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2019～2021
課題番号：１９Ｋ００００３８

研究課題名（和文）古代哲学からのムーシケー概念に基づく芸術考現学―「今日の詩学」の可能性を探る

研究課題名（英文）Artistic Thinking Based on the Concept of Mousike from Ancient Philosophy: Exploring the Possibilities of "Poetics Today"

研究代表者
小川　文子（Ogawa, Ayako）

学習院大学・文学部・講師

研究者番号：１０７２６５８２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：現代において、アートは多義的なものになり、何がアートで何がアートでないのか、それを決定する明確な基準がないように考えられる。しかし、他方で、アートかそうでないかを全く見分けることができないかと言われれば、そうではないようにも考えられる。こうした問題に対して、古代ギリシアの芸術概念を援用し、そこから古代において自明であった芸術制作の意味を探り、かえって現代のアートのあり方を考える試みを本研究で行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
従来の研究では芸術の価値を多義的に捉え、芸術史に対しても重層性、多重性を見て取っていたが、そこに通底するような根源的な芸術性を見出すことが、まさに本研究の目的であり、ここに本研究の学術的な意義がある。芸術の価値やその分類はこれまでも問われてきたが、それらをなめすような、基底部に共通の芸術性を考察した研究である。古代ギリシアの芸術制作において模倣概念は重要であるが、これはただ単なる「写し」の意味ではない。芸術は模倣でありつつもそこにジャンル「固有の快」を組み込むことでそれ固有の芸術となる、というアリストテレスの芸術観が、現代の多義化したアートに対してシンプルな芸術性を示唆すると考えられる。

研究成果の概要（英文）：Today, art has become so ambiguous, it seems to be no clear what is art and what is not. On the other hand, however, it seems that it is not impossible to distinguish between art and non-art at all. In response to this problem, this study attempts to explore the meaning of art production which was self-evident in ancient times, by using the ancient Greek concept of art, and in turn, to consider the state of art in the present.

研究分野：古代ギリシア哲学

キーワード：古代ギリシア哲学　芸術哲学　美学　詩学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

昨今の美学において、何か一つの価値や基準を設けて芸術を批評することや、芸術の定義を問うこと自体がきわめて困難である。というのも、アーサー・ダントーが示したように、アートが多元的なものになっていることは否めないからである。ゴンブリッヂが用いた「メンタル・セット（mental set）」やダントーの「アート・ワールド（art world）」のように、何かが作品として成立するためには、それが単体で成立しているのではなく、美術館という場や、キュレーターの存在、多数の鑑賞者などの様々な背景によって下支えされているかもしれない。しかし、このような従来の研究の背景には、作品が作品として成立するための何かが存在しているという前提的な考え方がある。それは一体何であろうか。こうした問題意識が本研究課題を論じたいと考える契機となった。こうした現状に対して、最も基本的な古典文献に立ち返ることで、返って混乱している現状に対して素朴な答えが提出できるのではないかと考え、本研究課題を扱いたいとの着想を得た。研究代表者は、博士論文『アリストテレス『詩学』におけるミュートス概念』、東京キララ社、2010 年において、本研究課題に先行して、すでに『詩学』の内容を検討してきた。また、平成 26 年から 3 年の期間で「若手研究（B）」研究課題名：「アウグスティヌス De musica へと繋がるムーシケー概念の歴史的展開」として、ムーシケー概念を検討してきた。こうした研究によって、ムーシケーやポイエーシスと言われる制作の基本的な部分が明らかとなったと考えてよかろう。また、これらの研究が本研究課題の下準備となっていると考えられる。関連する国内外の研究動向として、まず挙げられるのが、Noël Carroll, On Criticism, Routledge, 2009. である。キャロルはいわば「メタ批評」とも言うべき、批評の批評を展開し、芸術批評が既存の理解のように作品解釈に頼るものではないことを主張する。キャロルによれば、作品とは価値の創造者たる芸術家が意図的に作り出すもので、批評はそれぞれのジャンルやカテゴリーに従った芸術的な「価値づけ（artistic evaluation）」を行うことにあるというのだ。確かに、これは実践にも即した合理的な捉え方であるかもしれない。しかし、条件にしたがって「価値づけ」をすることによって、作品本来の価値が決まるわけではないし、批評の仕事がたとえ価値づけだったとしても、そもそもなぜそれが作品として批評の俎上にのぼるような対象と判断されるのか、ということにまでは解答しえないだろう。本研究課題では、こうした問題の根幹にかかわる、作品の作品性、ないし、芸術性とは何であるのかを掘り起こすものである。

２．研究の目的

本研究の目的は三つに絞られる。（A）古代の「詩作」から現代の「芸術」まで通底するものを規定し直すこと、（B）作品とそうでないものとを分かつのは何であるのかを問うこと、（C）作品を批評することがなぜ可能なのかを問い、哲学者が詩作を批評することにどのような意味があったのかを明らかにすることである。（A）に関しては、Morris Weitz, “The Role of Theory in Aesthetics”(1956), in : Philosophy Looks at the Arts: Contemporary Readings in Aesthetics, ed. By Joseph Margolis, rev. ed., Philadelphia, 1978 でウェイツが「芸術」とは「開かれたもの（an open concept）」 で、その場その場で新しい状況が常に生じるようなもので、「芸術」概念自体が「芸術とは何であるのか」を問うことが不可能なものとして規定されたと考えられる。小田部胤久、『西洋美学史』、東京大学出版会、2009 年においても、西洋美術史に渡る「芸術」理念の変化を概念史的に体系化して示してはいるものの、プラトンのような「芸術の本質」「芸術のイデア」があるという考え方はできないことが示唆される。（B）については、人が対象を「芸術」として見る時に、何を捉えてその対象を「芸術」として享受するのかということである。かのバウムガルテンも、『詩学』や『弁論術』を念頭に、「制作」に関して論じている（Alexander Baumgarten. Metaphysica. editio Ⅰ.Halle, 1739.）。古典に立ち返ることによって、むしろ人間が制作に見ようとする本質的な要素が浮かび上がってくることが予想される。（C）については、哲学者があえて学術の場面において詩作を取り扱うことで、専門的な基準や鑑識眼があると古代から目されていたことを暗に示している。本研究では、「ポイエーシス」の意味を明らかにするとともに、それが「ミメーシス」であるということを中心に、我々が「芸術（アート）」と称しているところのものの根源を追究する。実際のアートや美術史、美学、芸術学などの学問領域のあるべき姿に関わる射程の広い研究とすることも本研究の目的の一つである。

３．研究の方法

研究の方法としては、主として古典文献の読解により、古代における芸術観を明らかにし、そこから芸術概念に通底する作品における芸術性ないし制作性を明らかにするという方法を取る。主としてアリストテレスの『詩学』を扱うことにはなるが、それ以外にも、プラトン作品やピュタゴラスの断片なども用いて、古代における、ムーシケー、ポイエーシス、ミメーシスといった

概念の系譜を検討する。また、批評を可能せしめるものについては、偽ロンギヌス『崇高論』から Roberto Longhi, Proposte per una critica d'arte, Pesaro: Portatori d'acqua, 2014 など現代までの批評に関する文献を多角的に検討し、批評の何であるかを明らかにしていく。最終的には、現代アートをも含む「芸術」というものを如何に解釈・定義可能であるかを哲学的な観点から再検討する。例えば、古典から見られる芸術家と職人の違いや、レディ・メイド作品の扱い、解釈が鑑賞者に完全にゆだねられている作品が如何に作品として価値づけられるのかといった問題を検討する。現代において、芸術の形は多様である。インスタレーションやコンセプチュアル・アートなど、むしろただ「見る」ことのみを通じて「美」が享受されるケースは少ない。だが、このことの源流はむしろ古代に求められる。本研究では、紀元前 5 世紀からの古典文献を中心に、現代のアートにも通底する、制作と言われるものの意味を検討する。

４．研究成果

本研究の成果としてまず挙げられることは、アリストテレス『詩学』において芸術を芸術たらしめているところのものが「固有の快」の問題と切り離せないものであるということである。アリストテレスは、詩作について、それがミメーシスを通じてなされると指摘している。ただし、一般的に何かものを作ることはすべてミメーシスによる。実用品も芸術作品もどちらも模倣によって作られる。しかし、現代のレディメイド作品に関していうならば、本来実用品であるところのものを芸術作品にまで昇華させているのであって、なぜそのようなことが可能なのかという問いに対して、このアリストテレスのミメーシスについての考え方は非常に大きな示唆を含んでいる。芸術作品と実用品との間には、何か決定的な違いがあるはずなのであって、それが、まさに「固有の快」の有無なのである。両者は同じミメーシスによってもたらされるが、しかし、固有の快を有するか否か、ないし、芸術家が固有の快を我々に享受すべく制作しているか否かによって、それが芸術であるのかどうかが決定する。この考え方は、現代アートに関しても、間違いなく一つの基準になるだろう。また、芸術批評という試みも、この固有の快をどう評価するかに関わる問題である。そもそも、固有の快がなければ、それが芸術と認定されることはない。固有の快があるからこそ、芸術としての価値が生まれるともいえよう。他方で、ムーシケーの系譜についても検討したが、ムーシケー概念に関しては、ムーシケーと呼ばれるものが段々といわゆる「芸術」からは逃れ、むしろ「音」に関するものに収斂されていく流れを掴むに至った。例えば、プラトン『パイドン』においてはムーシケーがいわゆる韻律を有する詩作を意味しているが、アリストテレスが『詩学』において論じる詩作について、それが「ムーシケー」と言われることは一度もない。かわりに、悲劇の上演における音楽がムーシケーと呼ばれる。詩人が芸術家として詩作をなす時に、その詩作はムーシケーとは呼ばれない。そもそも、ムーシケー概念の意味は幅広く、音楽、天文学、舞踊など多岐にわたったが、このムーシケー概念に替わって、アリストテレスが新しく制作者の技術によって「固有の快」が組み込まれた新たな芸術のあり方を提案しているのである。その背景にはムーサの女神との関係があるだろう。アリストテレスは詩作をムーサの女神からは切り離して、芸術家の制作性のうちに語ろうとしているからである。「固有の快」を組み込むという話は、現代芸術にも見受けられる。一つ例に挙げるならば、1960 年台の mental furniture の考え方がある。アーティストは、暗黙の思考様式をオブジェクトに組み込む。だが、それは目立たないものであるから、大抵の人は単なる美しいフォルムの家具としてしか捉えることができない。しかし、実際には、それが単なる家具を超えた何かなのであり、それは沈黙のままに大衆に訴えかけているのである。また、批評家はこのような高度な思考様式を掴みそれを評価しなければならない。評価の如何に関わらず、このような思考様式が組み込まれているからこそ、mental furniture は単なる家具たりえないのである。本研究において鍵となった問題は「固有の快」であった。固有の快の解釈によって、芸術とそうでないものとを分かつものが何であるのか、古代のシンプルな考え方に立ち返ることによって、純粋な基準をおおよそ掴めたのではないだろうか。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 小川文子	４．巻 68
２．論文標題 『詩学』における「悲劇に固有の快」―アリストテレスの芸術哲学の可能性―	５．発行年 2022年
３．雑誌名 研究年報	６．最初と最後の頁 1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 小川文子
２．発表標題 『詩学』における「悲劇に固有の快」―アリストテレスの芸術哲学の可能性―
３．学会等名 美学会東部例会
４．発表年 2021年

１．発表者名 小川文子
２．発表標題 古代ギリシアにおける音楽の系譜
３．学会等名 科研費「機械学習を用いた東アジア数理調和思想の実証的研究と共生倫理の検討」（招待講演）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関